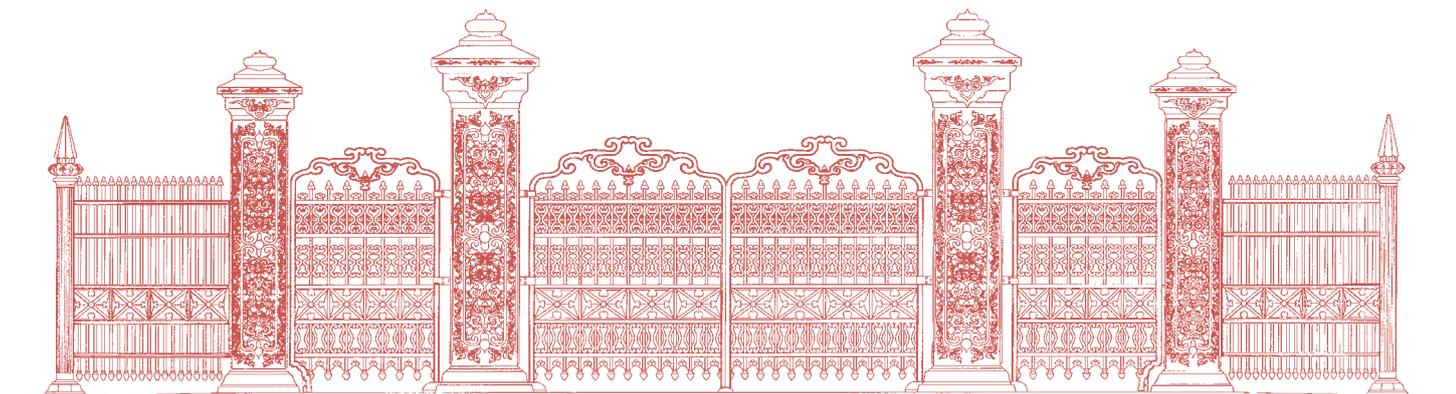


# 学習院アーカイブズ ニューズレター

Gakushuin Archives Newsletter 2018.2.20 vol.

# 11



## 学習院旧正門（重要文化財） - 現在は戸山キャンパス 女子大学、女子中・高等科正門

明治10(1877)年、学習院が神田錦町に開業した際設置された、美しいデザインを持つ鋳鉄門である。140年の歴史のうち、昭和5(1930)年より25(1950)年までは目白キャンパス内(西1号館南側、榊壇への入口)に置かれていた。

【左上写真】昭和18(1943)年 附属戦出陣式、【右上写真】門扉の意匠、【下図】立面図(公益財団法人 文化財建造物保存技術協会 提供)

## Contents

学生たちの見た大陸—旧制学習院の海外修学旅行 愛知大学国際問題研究所 客員研究員 長谷川 怜 .....	2
高埜利彦教授講演「学習院アーカイブズの効用」 学習院アーカイブズ 桑尾光太郎 .....	4
「院歌」ピアノ伴奏について 女子大学長 神田 典城 .....	6
目白の杜で想う 施設部長 中村 盟之 .....	7
主な活動(2017年7月～2018年1月) .....	8

# 学生たちの見た大陸 —旧制学習院の海外修学旅行



愛知大学国際問題研究所 客員研究員 長谷川 怜

現在、海外への修学旅行を実施する高校は多く、その行先も中国やアメリカ、オーストラリアなど様々である。実は戦前の旧制学習院でも海外修学旅行が行われていたと言え、驚く方もいるかも知れない。日本の勢力範囲や植民地（外地）を対象とした海外修学旅行に参加した学生たちは、何を見て、どう感じ、そしていかなる影響を受けたのか—知られざる学習院の海外修学旅行について紹介したい。

## 日本における海外修学旅行

日本で海外への修学旅行が行われるようになったのは、明治時代である。1905年（明治38年）の日露戦争の勝利により、日本は満洲（現在の中国東北部）で鉄道や炭鉱などロシアの旧権益を獲得した。それに伴い、邦人の満洲進出が盛んになり日本から満洲へのルートが次々に整備された。1906年、陸軍は中学以上の生徒の満洲・韓国旅行には御用船の無償乗船を認めると発表した。それを受けて、満洲修学旅行（朝鮮半島や中国北部を含む場合もあった）が全国で行われるようになっていく。新たな勢力範囲となった地域を若い世代に見せ、将来的に外地経営に携わる人材を育成しようとする意図があったといえるだろう。



1918年の学習院満洲修学旅行  
（旅順の203高地にて撮影）  
（一般社団法人尚友倶楽部蔵）

## 学習院の 海外修学旅行

1906年7月、文部省と陸軍が主催する「満洲教員視察旅行」に学習院の学生

と教員数名が参加した。これが学習院学生初の海外旅行である。この旅行には東洋史学者の白鳥庫吉しらとりくらきちも教員として参加し、教材となる様々な資料を現地で収集した。帰国後、参加者は校友会雑誌『輔仁会雑誌』の別冊として「満韓旅行記念号」を発行し、学内における満洲や韓国への関心を高めた。

その後、1918年（大正7年）に第1回海外修学旅行が行われ、戦前期に計10回実施された。旅行先は満洲・朝鮮・台湾・中国北部・内蒙古・シベリアなど主に日本の植民地や勢力範囲が対象だった。夏季休暇中に高等科学生と中等学科5年生から希望者を募って実施され、170円～300円の旅費を要した。

なお、学習院アーカイブズには海外修学旅行実施時の学生の参加願や旅程表、現地の様々な施設・機関宛の訪問依頼状などの書類が保管されている。

## 学生たちの感想

旅行に参加した学生は、帰国後『輔仁会雑誌』に旅行記を投稿したほか、講演会・発表会を開催し、現地での体験や感想を学内で共有した。



『奉天毎日新聞』に掲載された学習院修学旅行の記事  
（1925年7月31日）

参加者はどのような感想を抱いたのであろうか。1906年の「満洲教員視察旅行」の際は、朝鮮半島や満洲の人々への蔑視や日本の優位性を感想として書く学生が多かった。日露戦争による勝利で帝国意識が国内に高まりつつある時期であり、国内の言説が現地を見た学生にも影響を与えたのであろう。しか

し、大正期の修学旅行の際には、現地の風物や歴史に対する知的好奇心が学生の中で強くなっていく。満洲経営が徐々に安定し、また韓国併合を経て、帝國意識というもの日本人の間で普遍性を持つようになるに従い、日本の発展・拡大をいたづらに煽る言説が、メディアでも減少していったのに比例しているといえよう。

学生たちは、旅行の最中、自由行動の時間に現地の人々との交流を行い、現地の人々と同じ目線を保ち、訪問地の文化や習俗を実体験した。例えば1918年の旅行で満洲を訪問した松方義三郎<sup>i)</sup>は、張家口<sup>ちやうかこう</sup>で現地の人々向けの宿に宿泊し、夜に芝居を見学したことを喜び、中国を「親はしい」存在として認識した。また、岩村英武<sup>ii)</sup>は教授の鈴木大拙と共に奉天（現在の瀋陽）で寺院を見学し、仏教の教義やサンスクリット語についての解説を受け関心を高めた。そして、「僕がもし未だ小さい子供であつたら、きつと支那からは帰らない。満洲に自分は残るのだと云つて駄々を捏ねるでもあらう。…自分はたまたなく支那を去るのが厭だつた」と書いた。

また、彼らはいたづらに日本の満洲経営を称揚したり、優越感を持ちたりせず、むしろ満鉄の運営や職員の勤務態度などに対し辛辣ともいえる批評を加えた。旧制学習院の学生たちは、卒業後は政治家、外交官や軍人、国策会社の社員等になり日本の外交や満洲経営に携わる者が多かった。それゆえ、彼らの意識は高く、自らの将来を見据えて冷静に現地を観察していたのである。

### 旅行が学生に与えた影響—水野勝邦の事例

海外修学旅行は参加者たちにどのような影響を



水野勝邦が修学旅行で収集したパンフレット類。これ以外にも、旅行中の写真や書類などが保存されている（水野家蔵）

もたらしたのか。1925年の修学旅行をきっかけとして中国研究を志した人物を紹介しよう。それは、旧結城藩水野家第19代の水野勝邦<sup>かつくに</sup>（子爵）である。後年、勝邦は「（修学旅行に）強い感銘をうけたのです。…この旅行から中国と取り組む決意を持



修学旅行中、大連で食事をとる水野勝邦（水野家蔵）

ちました。それからは、事に臨み、考えるのに常に中国研究を前提とし、学習院卒業後は東京帝国大学に進学、中国研究の道を歩んだことを回想している。帝大卒業後には外務省派遣員（研究員）となり中国に赴任、1939年からは北京の西城屯絹胡同に住居（水野公館）を構えて貴族院議員を務めながら中国研究に従事し、戦後も私立大学で教鞭を取った。

勝邦のように、旅行をきっかけとして中国研究の道にまで進んだというのは特殊な例だが、海外修学旅行が学生たちに与えた影響の大きさの一端を知ることができるだろう。

戦前期、学習院では白鳥庫吉<sup>しおのやおん</sup>、塩谷温、鈴木大拙をはじめとする著名な東洋史学者、漢学者らが教員として名を連ね、水準の高い東洋学が講義されていた。海外修学旅行は、学生たちに授業で習った東洋の姿をより深く理解させ、また一方では日本の対外進出の現場を見せるための試みであった。そして、彼らの学問形成や進路選択において重要な意味を持つ事業であった<sup>iii)</sup>。

\*引用文中、現在では不適切な用語が含まれている場合がありますが、歴史的史料であることに鑑み、修正しませんでした。

- i) 松方義三郎は、松方正義の息子。満鉄に入社し、東亜経済調査局に勤務。登山家、日本ボーイスカウト第六代総長としても知られる。
- ii) 岩村英武は、海軍軍人岩村俊武の長男。フランス文学翻訳などに携わった。
- iii) 学習院の海外修学旅行の詳細については、拙稿「満洲を旅した学生たち—旧制学習院の満洲修学旅行を事例として」（伊藤真実子・村松弘一編『世界の蒐集—アジアをめぐる博物館・博覧会・海外旅行』山川出版社、2014）を参照。

# 高埜利彦教授講演 「学習院アーカイブズの効用」

桑尾 光太郎

2017（平成29）年12月5日、学習院アーカイブズ講演会が学習院大学西5号館202教室において開催され、学習院大学文学部史学科・同大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻の高埜利彦教授に標記の演題でご講演をいただいた。高埜教授は日本近世史の研究・教育において活躍されると共に、アーカイブズ学の確立と普及に尽力し、2004（平成16）年に日本アーカイブズ学会を創立し初代会長に就任したのをはじめ、2008（平成20）年の大学院アーカイブズ学専攻開設を推進し、学習院アーカイブズの設立にあたって企画立案および準備作業の中心を担われた。以下、高埜教授のご了解を得て講演の概要を紹介する。

## 1. 石山寺と東寺百合文書——通時的に

奈良時代に創建された滋賀県石山寺の所蔵資料の調査に、30数年間参加してきた。その調査において、江戸時代に加賀藩主の前田家から寄付された、古文書を取めるための桐箱を発見した。石山寺の僧尊賢による日記には、加賀藩が文書を借用し筆写を行った際に二つの箱の寄付を受けたとの記述が残されており、歴代の加賀藩主が古文書を文化財として守る思想を持っていたことを示している。

加賀藩は、ユネスコ世界の記憶に登録されている東寺百合文書の桐箱を贈ったことでも知られる。東寺が荘園領主だった中世の時代、東寺文書は支配の権利を保証する証拠（エビデンス）として作成された現用文書であった。豊臣秀吉の太閤検地によって荘園が没収され、寺領が安堵されて以降、それらの文書は非現用の歴史遺産となり、加賀前田家は文書を借用し筆写した返礼として百個の桐箱を贈った。

また山梨県都留市の円通院には、代々の村の役人が村の共有物として引き継いできた年貢を納めた目録である皆済目録が残され、山梨県一宮町の戸長文書には水争いを防ぐため農業用水の権利を示す証拠としての村絵図が残されてきた。

こうした証拠としての記録を残し未来に伝えようとする営みは、人々の知恵として古代から行われてきた。アーカイブズとは通時的に見ると、(A)す



で過去から伝えられた歴史的な文書（歴史遺産）と、(B) 現在不断に発生するエビデンスとしての記録の、大きく二つに区分される。(A)(B) 二つのアーカイブズを、どのように未来に伝えていくかの努力が続けられてきたのである。

## 2. 現在のアーカイブズ機関——共時的に

国（政府・19省庁）や独立行政法人等の文書については、2011（平成23）年に施行された公文書管理法で規定され、(A)(B) 二つのアーカイブズは国立公文書館において管理・公開されている。また、自治体では各県・市区町村の文書館で管理・公開されている。こうした公的なアーカイブズは国民・市民の知る権利を保障し、権力の独裁や密室政治をさせないための装置であり民主主義の基盤となっている。

反面で、森友・加計学園問題や厚生省薬害エイズ問題などに象徴される記録の隠蔽や廃棄が絶えない。これは役人たちがアーカイブズの制度を学ぶ機会を持たず、現在もほとんど理解していないからである。学習院大学では総合基礎科目「記録保存と現代」を1996（平成8）年から開講している。世界や日本のアーカイブズ制度や文書の公開・保存、個人情報に関わる課題などをアーカイブズについて学ぶ機会をもつことができれば、公務員となった後も無知からくる廃棄は防ぐことができたであろう。なお学習院アーカイブズには、1945（昭和20）年8月の敗戦直後に、政府からの機密文書の焼却を指示した通知が残されている。証拠隠滅をさせた体質は戦後

72年を経てどれだけ変わっているのだろうか。

フランスは革命以来アルシーブを充実させてきたが、アーキビスト養成のシステムとして、エコール・デ・シャルトの他にリヨン大学にはビジネスアーキビストのための教育課程が設置されている。企業におけるアーカイブズは社史編纂のためだけではなく、経営戦略の見直しや、株主・市民に対する説明責任を果たす際、さらには訴訟に備え証拠となる記録を用意する際に必要となる。ドイツやアメリカでも訴訟の際のエビデンスとして、ビジネスアーカイブズが必要とされている。

大学アーカイブズについては、国立大学のアーカイブズは京都大学大学文書館をはじめ15大学に設置されている。しかし残る71の国立大学ではアーカイブズが未設置のままである。私立大学におけるアーカイブズは増加しているが、創立者の建学の精神の顕彰や大学史編纂と、大学事務文書の管理・公開という二つの役割のうち、現状では前者の比重が高くなっている。

### 3. 学習院アーカイブズとその効用

2011年に設立された学習院アーカイブズは、幼稚園から大学・法人まで院全体の文書・資料を対象としている。その目的は①史資料により学習院の歴史を確認する場として、教育研究・広報など諸活動に寄与することと、②文書の整理と管理を進め、事務効率の向上など業務改善に寄与することにある。前述の(B)に該当する事務文書の管理にも力点を置き、その実践として「文書ファイル管理簿」の作成と更新を推進し、院全体の文書管理の合理化に貢献してきた。その一方で、文書収蔵スペースの確保や、文書整理にあたっての選別が課題となっている。

学習院アーカイブズの効用の一つは、前述(A)のような学習院の歴史を示す諸資料により、個人(学生・教職員・卒業生・関係者)と組織・団体にとっての自己確認(アイデンティティ)の材料を提供することである。つまり「自分は誰なのか」を、利用者はアーカイブズによって確認することができる。もう一つは(B)のような現在作成される事務文書はじめ各種記録の管理・公開により、学習院が説明責任(アカウンタビリティ)を果たすことへの貢献である。

### 4. おわりに——社会の変貌とアーカイブズの意義

21世紀に入って、グローバル化と規制緩和と政策は日本の社会を大きく転換させた。行財政改革と規制緩和は文部科学省にも影響し、大学設置基準の大幅

緩和と経済特区の設置により大学生数の増加と質の低下が起きる一方で、文部科学省は自己評価や外部評価制度を導入し、FD制度によって教育の質を保証させ、さらに教育情報の公表を義務付けた。

海外ファンドの日本市場参入をはじめとする経済のグローバル化によって、株式会社や日本社会の価値観は大きく改まった。つまり世界標準(グローバルスタンダード)である法令遵守(コンプライアンス)や統治(ガバナンス)・説明責任(アカウンタビリティ)が強く求められるようになり、今や社会常識となりつつある。皮肉な形で民主主義の基盤作りが要請されているといえる。

文部科学省が大学に求めることはこの世界標準に合致しており、教育情報(3ポリシー)の公表が2011年から義務化された。ではそれらが実際に行われたかどうかを検証するため、証拠に基づく説明・証明が求められる。そのために記録を管理・公開するアーカイブズの存在が不可欠であり、アーカイブズの設置義務化はいずれ中教審で日程に上ることになるだろう。

これからの私立学校には、文部科学省の政策を見極めながらも私学として自立した独自の判断が必要となる。学習院アーカイブズには、私学としての存在意義や独自の判断を支える材料を用意し、提供することが求められる。説明責任を果たすために不可欠な、学習院アーカイブズを活用してほしい。

講演に続いて、自校史授業のあり方やイギリスと比較してのアーカイブズ及びアーキビストの地位等について質疑応答が行われた。

講演の冒頭で高埜教授は、草創期のテレビは相撲中継と落語が定番だったとして、印象に残った噺家として三遊亭圓生と古今亭志ん生を挙げた。圓生は淀みのない語り口が素晴らしく、志ん生は天衣無縫な存在そのものが落語の世界であり、寄席の客は志ん生自身を観に来ていたのだと思う、といった「まくら」を語られた。学習院大学が開学してまもない1951(昭和26)年、文芸部主催の古典落語鑑賞会が今回会場である西5号館の位置に建っていた大講義室(1949～1992年)で開催され、志ん生をはじめ春風亭柳好・桂小文治らが出演している。会を企画したのは、文芸部員で文政学部で在学していた吉村昭だったことを補足しておく。

ご多忙のなか講師をご快諾いただき、広汎な話題を盛り込みながらも緩急自在にお話いただいた高埜教授に深く御礼申し上げます。

(学習院アーカイブズ)

# 「院歌」ピアノ伴奏について

女子大学長 神田 典城

前号の記事「学習院院歌原曲とのご縁、想い」(萩谷克己氏)の中に、院歌の原曲にはピアノ伴奏によるファンファーレ風の前奏部と後奏部があり、「その前奏部と後奏部は永く眠りに就いていました…」との記述があった。私には恰も作曲されてから打ち捨てられていたかのような、少なくとも、長く埋もれていたものであると主張するような雰囲気を感じられ、まさにそのことに違和感を覚えたので、この場をお借りして以下、私の知る限りの事実を記しておきたい。

私は1969(昭和44)年に学習院大学に入学すると同時に音楽部に入部した。同音楽部は合唱団と管弦楽団が一つの組織として活動しており、私は両方の活動に参加していた。そして卒業後も学習院に所属し続けたため、OBとしての演奏への賛助出演など、音楽部との関わりは50年近くなり、途中からは女子大音楽部の顧問も務めている。

合唱団(混声・男声・大学女声・短大(のち女子大)女声)は演奏会の冒頭で院歌を演奏するのが通例であり、管弦楽団もかつては合唱団と一緒にステージで院歌を演奏していた。また、学生のコンパでも、OBの集まりでも締めは必ず院歌となる。したがって、音楽部に関係していると院歌と接する機会は数えきれない。

さて、例のピアノ譜による公開の場での演奏だが、男声は基本的にアカペラ。管弦楽団と合唱団の合同のステージでの演奏は、もちろん伴奏部演奏は管弦楽なのでこれらは除外を前提としておく。

そこでまずは私の経験。このピアノ伴奏の楽曲を意識した初めは、1年生の5月か6月の頃で、女声合唱団のステージを聴いた時のこと。大学女声か短大女声かはもはや定かではないが、3連符で始まったピアノの前奏の長さが強烈に印象づけられた。一般的に言って通常の前奏は、曲の最後のひとフレーズか最初のひとフレーズであることが多い。前号掲載の譜例で言えば、歌詞の「たちあがれしんがくしゅういん」の4小節を前奏とするようなタイプで、院歌の伴奏譜には現にこのようなバージョンもある

し、応援団のリーダーもそのように音頭を取っていた。

ところが最初のフレーズ型に属する当該のバージョンでは、3連符で始まって4小節たたないとメロディーラインが出てこない。そしてそれは8小節間続く。つまり曲の半分を演奏して、やっと本体(歌)になる。私はこれを初めて聞いた時、なかなか歌が始まらないので、ピアノだけで初めに全曲を演奏してしまうのかと思ったことをよく覚えている。しかもこの伴奏は歌と同時に終わらず、更に4小節の後奏が続いていたのだ。私の記憶はまさに前号掲載のピアノ譜によるものであり、これは1969年に公開のコンサートで披露されたものであるという記憶に間違いはない。そしてその後、このバージョンの伴奏を幾度となく聞くことになる。因みに今でも私はこの伴奏に特徴的な三連符付きで院歌を歌うことができる。

音楽部の先輩後輩の証言によると、1965(昭和40)年入学の男声メンバーで、後々まで合唱指導者として活躍した先輩は、混声と女声はいつもこの伴奏譜で歌っていたという。1973(昭和48)年と1974(昭和49)年入学の女声メンバーでピアニストも兼ねていた2名の後輩は、この譜面でいつも弾いていたと証言した。1980(昭和55)年入学の男声メンバーの後輩も、この伴奏で歌っていたことを覚えていた。ただし、この1980年より後の入学の後輩はこの譜面を知らないという。

となると、少なくとも1965年入学の先輩の4学年上の代から、1980年の後輩の入学までの20年ほどの間は、当該の伴奏譜が公の場で使用されていたということになる。因みに昨年11月18日に音楽部OBの集まりがあり、例によって院歌で締めるにあたり、上記1973年入学で合唱団のピアニストだったメンバーは、暗譜でこの伴奏譜を弾いたのだった。

以上が、「永く眠りに就いて…」という記述への違和感の依って来るゆえんである。

# 目白の杜で想う

施設部長 中村 盟之

「目白の緑を題材に寄稿してほしい」学習院アーカイブズから依頼が来た。文才の無い私に恥を搔かせるつもりかとお断りしようとしたが、豊かな目白の杜について少し考えてみることにした。

明治41(1908)年に学習院が目白へ移転して、今年で110年となる。当然ではあるが、当時の目白校地と今の目白キャンパスでは大きく変容している。それでも北別館のように移転当時の建築物が形を残していたり、血洗いの池やキャンパス南側の杜を形成する樹木など、多くの自然が当時を偲ばせてくれている。

現在、目白キャンパスの敷地は204,667㎡である。それに対し、緑地面積は約68,000㎡にわたり、およそ150種4,000本の樹木が息づいている。目白キャンパスの歴史の中では、それぞれの時代の要請に基づき新たな教室棟や研究室棟、体育施設などが建設され、多くの樹木が伐採されてきたことであろう。

南7号館（平成21年12月竣工）を建築する際にも、目白キャンパス南側の目白の杜の一部を伐採するこ



樹木を根こそぎ運搬するところ  
横に立つ人物と比べると、樹高が想像できる



移植完了

ととなったが、大きく育った樹木を残そうと、出来る限りの事を行った。具体的には写真にあるような樹高約20mもある大木を、出来るだけ地中に張った根を残し、土ごと移植するといった工事を行うことで、長年目白の地を見守ってくれて

いる木を後世に残し、近隣との視界遮蔽効果も上げることを目指した（どちらかと言うと工事的には近隣との視界遮蔽のためという理由がウエイトが大きかったと思う）。当時、移植のために枝払いをした樹木ではあるが、現在、かなりの生命力で枝葉も成長している。

今後も、時代の要請で新たな環境を整備していかなければならないが、新たなものを作り上げていくには広いようで狭いキャンパスである。樹木にしても建造物にしても、人それぞれに思い出・思い入れがあるだろうが、敷地も財源も無尽蔵にあるわけではなく、われわれには取捨選択していく責任もある。過去から引き継いだこれらのものを未来へ引き継ぐにあたり、何を残し、何を世代交代させていくのか決断していかなければならない。

100年後の目白キャンパスはどのようになっているのであろうか。



移植からおよそ10年、自然の回復力には驚かされる

## 主な活動 (2017年7月～2018年1月)

### ◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新
- ②西5号館地下倉庫の非現用文書ファイルの整理
- ③各部署で保存期間満了となった文書ファイルの評価選別 (6部署)
- ④大学学部学科事務室所蔵文書の調査

### ◆文書・資料の調査・整理及び目録作成

- ①清水文雄日記 (昭和20～22年分) の調査・撮影 (8～12月)
- ②近藤正夫元学長資料の整理 (9月)
- ③教務課所蔵マイクロフィルムの調査・整理 (11月)
- ④初等科所蔵資料の調査・整理 (12月)



初等科所蔵資料調査

- ⑤女子部史料室・図書館所蔵資料の整理

### ◆史資料の調査・デジタル化・修復

- ①宮内庁宮内公文書館所蔵、学習院関係公文書のデジタル化
- ②昭和7年中等科卒業制作版画のデジタル化 (10月)



中等科卒業制作版画 (西1号館)

- ③大学生生活映像フィルム (昭和30年頃)、安倍能成音声テープのデジタル化 (10月)
- ④自動演奏ピアノの調律 (11月)
- ⑤戦後初期酸性劣化文書の修復 (11月～)
- ⑥立花家文書 (学習院創立期史料) のデジタル化 (1月)

### ◆史資料の受贈・購入

- ①昭和19年中等科勤労働員関係資料 (7月)
- ②大学紛争裁判関係資料 (9月)
- ③旅順開城記念展覧会写真帖 (10月)
- ④学習院輔仁会資料 (文化大会パンフレット他) (11月)
- ⑤女子学習院関係資料 (大正・昭和初期) (12月)
- ⑥明治21年学生集合写真 (1月) ほか

### ◆講演会・教育支援・広報支援等

- ①大学史料館秋季特別展「黎明期の学習院—神田・虎ノ門のころ—」への協力・資料貸し出し
- ②初等科創立140周年記念式典 (10月17日開催) への写真提供
- ③国立公文書館「アーカイブズ研修」での施設・所蔵資料紹介 (9月27日)
- ④桜友会特別フォーラム (11月1日開催) への資料提供
- ⑤第84回史料館講座において講演「史料よりみる近代教育の始まりと学生」(桑尾光太郎、10月28日)
- ⑥「安倍能成展」(会場：愛媛県立美術館)、「重見周吉の世界展」(会場：坂の上の雲ミュージアム) への資料貸し出し・写真提供
- ⑦『学習院広報』等への寄稿
- ⑧学習院アーカイブズ講演会 (高埜利彦教授) 開催 (12月5日)

### ◆その他

- ①全国大学史資料協議会への参加、東京大学 (7月)・愛知大学 (10月)・清泉女子大学 (12月)・国際基督教大学 (1月)

学習院アーカイブズ・ニュースレター第11号  
2018 (平成30) 年2月20日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ  
Gakushuin Archives  
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1  
TEL 03-5992-1285 (直通)  
事務室 西5号館 (本部棟) 地下1階  
<http://www.gakushuin.ac.jp/ad/archives/>